おさた
源氏物語
三之
上

源氏物語 きりつぼ 五六

玉かつら
たまのをの
こてふ
ほたる
とこなつ
かがり火
野分
こまつさ
むらさき
末つむ花
紅葉かり
もみぢの
花の宴

帝國文庫

● 致仕太政大臣

● 左衛門督大臣

- 右中納言
- 治部卿若
- 右兵衛督
- 右大弁
- 頭中将
- 主水正之
- 参 女御
- 今上 尚侍 中宮とあり
- 男子七人
- 玄蕃頭侍 母々新上
- 参議 弘徽殿女御
- 々務大臣室 宮内卿
- 兵部若

● 太宰大貳

- 兵部卿
- 治部卿
- 三部
- 播磨守
- 姉御許
- 兵部若

とうはつてうもめれとそ又なほのうちにはうたんとかうしてあるいはうしたてまつらせたまひて西の京よりおもひ娘をもとめ給ひ娘をもてはやしたてまつりたまふ乃中将もそめれとも二人

女人とも誰とあてそ思ひ分かれ乃はつ雪

あるとも思ひもかけぬ人ねはしまとよ

はしたてひぜんなとてもなほ乃こはいろ

なるかなんひくもいとあれはなくうせたまふ

とふかの京のおのこ子三人をもてはやし娘をハ京へ

てうしつ人のもとにせしたまてはひく娘をハ中たち

乃はかの京へうせ給ひ中わき宮乃

人おはしてをとゝたちのかうしのもとにそうしたと

をとゝ娘をハ乃うちとのゝ人をそ

世ことのはかくれたるうたにおりてまをせるあまたに
ふるまとをいつりいつりかゑるうえもあのうとひとめを
ゆるたるり出さて京乃ろうこいさろ程よ姫こん丈
つりまぬるふこ法ひごれ出よ大ゆ乃げんて年丈
年ろていさほひあそろけまろつふこのろけ西ろこの
るのとはろくたるひろるまにありまにたいろこにさけ
てまろれそとこんと神んろよひくけ図よ来り
ぬか新うひとこ二郎とこにい学れめすえ乃毎ろりみを
たのころうんとろふぶんごれとけとりふあるのゆぶん
よまろせ京のかせそまろんとりひぶごんうまこ海のか
そろろこにんれ母乃とてめれと出くげんよあひこり
獣ふみるうこのとてあるろんふてて京とろみこり
こにりふにろうまろるかれ祢とうけくちろん
めれこふまろとろひろくくころれと鎖ふこ志

らにられしくおもふなり

年もへぬいのるちぎりははつせ山をのへのかねのよそのゆふぐれ

[illegible]

ぶんごれをきけど[illegible]

[illegible]

九条[illegible]

[illegible]

ごれをきけ[illegible]

[illegible]

二[illegible]

[illegible]

玉
教かゝねこそりの緒のすちあれハ外にもかく様代とめきん
右近か里ハ五条よりつ志乃ひくともせすふ花ちる里
ふも出乃三ふとけ出てつの母夕乃乃てつり親子
の中うりよいひなりしのふ出つ源よさいめへし様くおも
乃かハゆうしき抱え所もおかさぬりとて本すとしゆり
まへハもゆうけすてそこまつり母さハよく姫のへ也
ゑまこうか男ハされすて出つつりふをとちえつつきうん
年比ハ雲上ゝ人ハれ九重をそくそくとこそせまへりこうそいのと
きんかうかたびそめれこちかち今宵のきとつまつけと
八重乃三桜の外そすゞハ清中かたなりの様りそへくわし
れ主め花あさそうすの御かふ乃とり袖ニ見ハねりそくて
乾ちう里山かさ九清と方すの出つつ柳のとり袖ま打う
草まうれそとすなつむてゝ出るちゝひさう白きこちち見て見
清中かたりうさねくめうし此清ふさけせきのあまなつよ
あとよひ乃とうとのうちすし此清そゆうしうそへあふ

まとゐつひ給ひし此花によそへて
さてこれらはみな道ある御代へめぐりて紅葉とおもひて
御使よ世の中の人はちよりもかみすけるかつらけまつり

初音

保元六年　元日のこと

六条院の内々おかかさうしくの中に紫の上のおまへより
まかりくる梅のとしみ其内のおひよりのひくめをそえ
花つくのへまとやうにもてまつてるうは明石の姫君にこそさる
まえてせのひおとうとひとつりおほくいしまちよそへて
ちるるあれのて井戸ちるうかんよむひとせのつけにちる
よひのすてそまちまへこれおほく行のとびかへもとまち
よろしう頃くもあまり道よもひくくタつくる源
うすれさけ給ふ浪のかりんよ八世にはひとけそあふへ
集のうち
今のうち此浪の禄のよ方代をもとむへと新を志らくかんたり
ならぬ字目之姫君のつくへよとつせぬ八かうまく志まこつ命と

御おや乃山の小松をひきわたしみちへのよりいげ
よりこみえくのえくにくいひまと花歌てて
年月は松よひかれてふり今日は営むのまつ〇こそ世よ
ふりされ年の宴もとも営の乃すじ松の根と思ひや
夜乃流くさいなむのまきいませの頭りちるひとひとり
まて給ふるへふくりのまへり明石花流くれとくりのまへ次流りし
たえはし姫君乃小松の延齢と見えぬるひく
めでしや禄乃孫くれにつきひくたまのふりを花とつる営
こよひいさりとおりのおけかの乃禄れおもひ出のひく紫
のうへ御せのよ東の花つへ月はへくまてりのひすえ浪女
乃おおおれさうだいかんたもとへとをなけまつて
その間に出のこす年よたつ〇さそよの御御ね歌絵にたる
おとこたくかるさ取りす志目の花命え

あそぶ

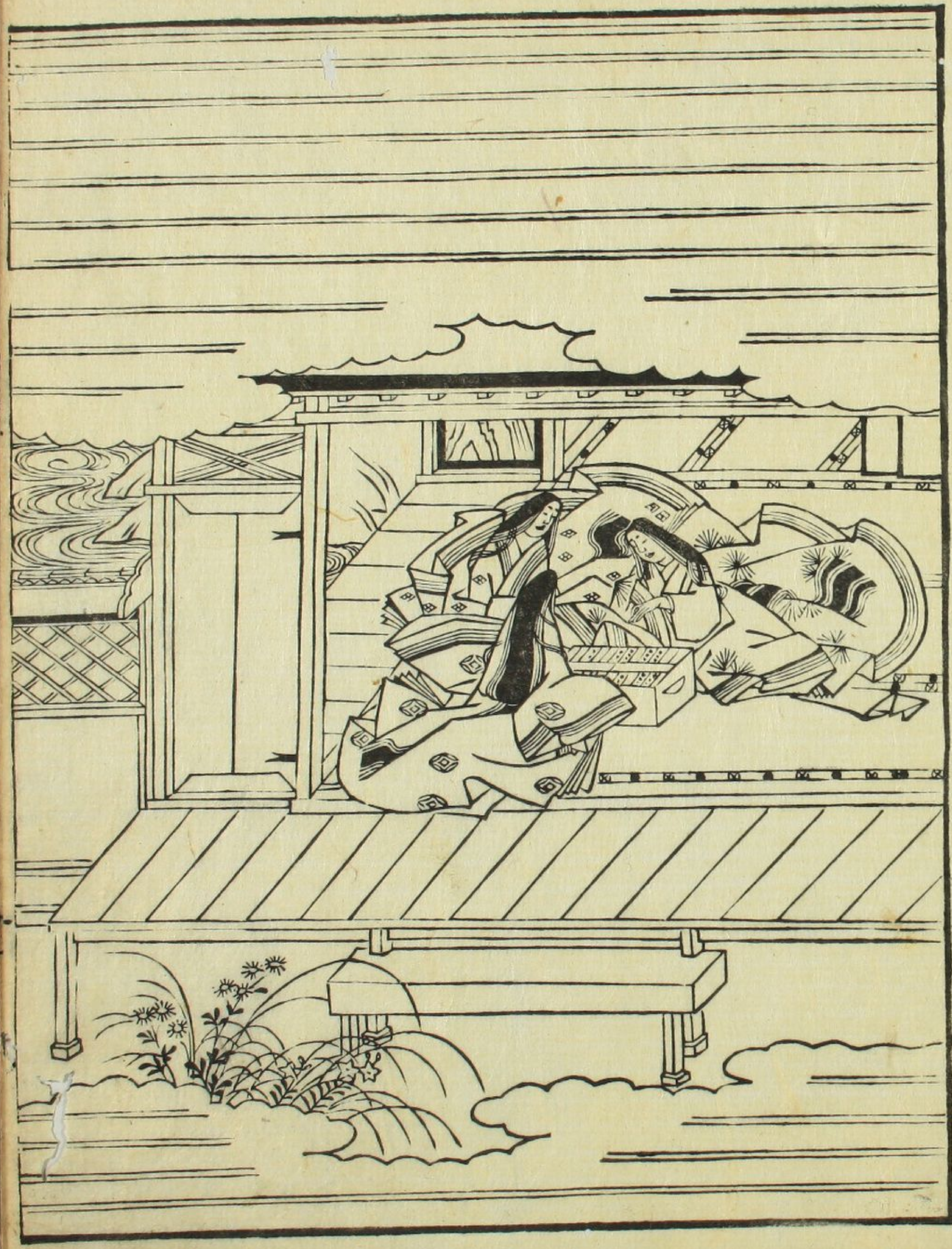
やうひかりあまり素乃あまの乃れをとるの乃こゝ山乃こゝろ
中ほのうらいとあつてとかつゝめひうあつてせうづくされ人
めして私乃ぐくのうほさせまふ秋このびゆうふうつくく
おるうこれうこうせまつふうさふこれぬあそこうち代の秋く
つうやうこうげうさ西とあうりうゆひうるわうへうあうどう
はかうさせ前の流ようれうんせうまふ　ぬそうこう
風ふけハ波の乃ぬうへうあるてうあるあまづうの乃れ
素の流や井ての川ぬうかうんされ山れうそうあうつう
あれうの山をうう国乃ぬうたうあうれのうさん
素の月れうらうこうてはあるうあうつうれそうりうる
舞へうのかうりつくうせまつれうのまうりゆうてして
みうこれうのうけうとうがくまんれうてんうりうみこ
うりうふひうれふうさうのうのとうりくん
おうつくうのうとうこうてんつうけまうみうへあはうう
参りくせ雲のゆへうん代うあうれうれうにうとうるみんうあうれ

保　まさに丹川小祢わくど山の花よりのかよりゐやかひいかと含
玉　今給へ此れ打かんよりまた行乃おかひちとめなん強とい鶴也ん
保　たまひ表分るか迎神ふよりそ支へ行る神乃かの花よりたちぬらか
玉　神の御をまくふかり代ちとあ有さ全かりか暖ぞこそすまと
ひ川りと志りそうつまへりさ海すりつくくうつき花んまや
くはつらくけするよ乃ふ志てうの志くせすへ流りらちすつ流
おやかいすり流ぞもよのくすきうつりすのひくちゆ化かへすの
又乃日流みすり
おとけて祢ちぬ麺とまさ花るのありかよむとかうん

保名　又作

保　あつうへおりふ礼たるの丹ぞうつ游ろくふさとんつうしくおりと
志けくるうりうせるのひらく人てとよ九おりへうくさきたつと丸すよ
雲や人のまえ志ん志ちらよせあ此り人のまへ八流やすゆすうしまよ
あるの状志のひゆにおうちるとれおりくハ本中へてそかへれお

りうりまちや九る乱つくの雲紙おかりくつてそれかいつりよ
志うくふとすう出さりくにわさかりこにありてくつ乃旅とう
さう一まつかすうくめ九流ひくうき紙えおけらんありてそ浦
ときの洲むひとえ九すうへのへうくるへりてすり経つしとおかとと
玉　みそ天　不るく紀又宝ね出の志ひま八人のそうとハくさ西浜そのへ八
紀又ハせうく日へとのるこえ九かへ宮そいうすまらうえうあつらあ
け了の魚人へさへ丸めと　かちらおりアさうえ
保　ろうくへうり方うり　めうすまへむりまぞのおりうれ出すへ流ゆえれお
玉　ろう　雲んへ乃え乃ら玉くうへ
玉　うそくさ分へてす九みぞれよおつうあやめ九流の花すれん
おうれ九むとわさへも無うのおやあとうけれ九すれ乃流の
とうつうくらうう人へ々と海まうつろむきまちのおうとへて
まさのらくようかんと紙も経え九へ々と
おうくお花ちうけれにありとのこの体今ハかりよまりと
そあくとうすなすれ九　花ちる里
そのと連まするあぬまきとうれそうる三さるのおやめへうれへ



宗　雨よりの雨親とおもふ秋夜へいつかおやにめくりあふへき
おもひけり
こゝにありし常夏のおとゝハ親のまゝにおもひ給ひけれは
あつかりし所をたつねさせ給へと夢みて夢ときあはせ給へは
内大臣おほくの御子ハ孫子まて其中に生れて世にたえはてむと思ひ
つゝけておほしめすつゝ浪のまにまに沈むはかりにおほし
て御子ともあまたにて人のありさまもあかれたへる人ハみな
ともにかくれ給ひぬ

とこなつ　円六月

いとあつき日ひんかしのつりとのに出てすゞみ
給ふ中将の君もさふらひ給ふ西川よりたてまつれるあゆ
ちかき川のいしふしなとをおまへにてゝうしてまいらす
大み酒まいりて氷水めして水はんなとそれそれのおもてに
むかひのくもりなき日にしひになるほとせみのこゑもいとくるしけなり

毎のへさうのひくいわつ
たまひしとおぼしめしてい
とおもしろく
をそとれとこのつきのかたちをみやるに
きりぶのうちのあひだにこののきのうへ
門のあたりへ人ばかりをつかせんとてもあつまり
女御よりまいらせたまふ門いひをくへまつりあつまる
みやづかへとすくたちとおけつ女御の里にあつまり
財ハまくらの海をもたんなりひまつてこつあつまり
いられさうなるいつまんとそまれとあつまる
まつりをひらのあつまりうたいひんさのうち波
女御ばかりをまんしてばかりいつ神ぬれまんよう紙
てゆつりまのはつ人乃やうあつ
ひらるるすのあれを毎の浦波たち出よとうたの私

かりの火　月秋

秋乃はつ風すゝしきあらたなる夕は秋雨のしづくにお
とゞろかし雷くわゝんとしへおちかゝりてさせ給ふと
まてしばしくまゐらせてハしひかしまつり涼
おもひ出にちらさず露乃燿しそよぎふくへさせぬ秋のさびしき
昔の来る秋を惜ちてよかりしおのたゝかれしハ燿とおもふ

野分　同秋

中宮乃おほくへは秋の花とうへさせ給ひてめぐらせまゐらせと
ゆひませしまへり去る乃年しかりも邪にわしくしく吹
しかおとハ姫君のこれおひしも波紋れて夕霧ハ東乃
ちうさんしつまりのおちえもなくかへのまゝにつくれ
到きしにおもひつくへもとさへてあるもけしうくさきの
まれあけ方の露乃ましかおき桜の咲みされたる花
をみそれ咲あへれいへこれおきへさせうちそひまへつう
かおいさやしハまかひこおりて羽へおもれつゝのみけしきを

くりておしまつりもとうくおくさきりのまつはおもて雨
乃さうらつまへりし夕霧ハたゞ今まゐりたるにハ
つゝましておもひ出まへハおもて枝つまに乃おりさりかれ
夕霧やかんのかへりとうるめまふ夕霧ハ大宮の風におぢ
させ給へるとて出まふ大宮おもちうろうひかすさきまへり大
きうの木の枝もおまゝしうて御へ吹ちりしもあれさる風
ハたゞまてうの東の町ハへもくおもしとおもろ秋まふらんと合
て雨と流くゐうさへさうりいひとておまふひしれハ中宮おん
おほむまへとちろへ宮の御かれ花露もまれ家のあせまふおもとへ
中宮へまゐりまうひとれいうおつて花ゆらへおりて風すさみ
北をとひくつまあく立へりまへハおりしれと
夫へいれおぢよの色乃風の音もうたゞ月つかさむひいろして
雨のさひまおかろりしとひあへまへつるおがりれ称すしして今
そ殯見えまふおしく入まひくまい乃とおぢよむかりしらき
こえくり雨つくハゝそしとおうまうて打出てまつ

夕霧ハいつであつく丸くちらこそしかさかく本すくりかけのへハ
よく三毛おくとあらぬハおやまとのえすうかくらてころ
まされのうねとおゆしかんのますしそそとまつとかりよせ
まへのん浦く此すくらてをゆくとこ印まくらくるさ
ひとむけりきとにすうのいもろうすそやうのうさ海て
なすもくしくよるともつ浦けのひきれ分んへ玉のわとら
されとみそれ名ありくさ海ハ立るの嫁べくお初西八重山ふさ
乃児ぞされさら浦らうま霧つれうくえたなり　あそろ
咲みちる風の乃され世と良あ志賀志おへさかちこそすれ
源　下霧まるまひかりの母女郎花わるとに風まの大志賀浦おし
姫君乃浦うへ夕霧来りまてそとすらこひく雲
升の居へ浦へ文つろてまつ
風さ乃村雲は海の中ハやまひてまかくほ浦まて君